心理科学 第38巻第1号
（2017年6月）

浦河べてるの家の当事者研究の語りとリカバリー
テキストマイニング分析

小平 朋江　　いとう たけひこ
（聖隷クリストファー大学）　（和光大学）

Ⅰ　問題と目的

1．当事者研究の発展

当事者研究とは、2002年に浦河べてるの家によって始められた、精神障害をもつ人々を中心とした当事者の当事者による当事者のための研究である。以後、当事者研究は日本全国と海外にまで広がっている。「当事者研究」をデータベースで検索すると（2016年6月26日現在）、CiNii Articlesで171件、医中誌Webで112件、CiNii Booksで25件がヒットした。2016年10月には第13回当事者研究全国交流集会が大阪で開催された。向谷地生良（2015）は、当事者研究の特徴を「その人のかかえた苦労を語る新しい“言葉”と知恵を生み出す営み」であり、「病気の症状もひとつの自己表現だとするならば、“病気で語る”のではなく、自分の言葉で語ることができた時に回復が始ま」るとしている。

2．本研究の目的

大高・いとう・小平（2010）は、浦河べてるの家の当事者研究のウェブサイトを分析し、テキストマイニングが有効であり重要な分析方法であることを示した。本研究の目的は、浦河べてるの家の当事者研究による研究成果のテキストマイニングにより、表現の特徴、特に用いられた単語を分析することで、当事者視点から精神障害のリカバリーについて考察することである。

Ⅱ　用語の定義

1．当事者研究とは

向谷地生良（2015）によれば、当事者研究とは、「病気を体験した当事者自身が、仲間や関係者と一緒に自分の生きづらさの意味を考えたり、解消策などについて研究し合う活動」であり、べてるしあわせ研究所・向谷地（2009）によれば、「当事者が主役になり、自らの生きづらさに『研究』という視点でアプローチする『当事者研究』という自助プログラム」である。

2．リカバリーとは

ここでは、特に向谷地生良（2015）から、リカバリーの特徴を記述していると捉えられるものを、以下にいくつか引用してみる。

- 精神障害における回復とは、単に「症状がなくなる」ことを意味するのではなく、誰もがそうであるように、人の暮らしを支える大切な要素が幾重にも積み重なってはじめて見いだされるもの
- 症状が消えるだけの回復は、幻聴や妄想をかかえながらも、活き活きと暮らしている人たちと比べた場合、「人生の質」という面から考えると、やはり見劣りしてしまいます。
- 「病気さえなかったら」の人生から、「病気の体験を生かした」人生をいつも大切にしてきたのが、べてるの人たちの選択した生き方なのです。
- 薬、社会的な支援体制、家族のサポート、本人

の生きがい、社会生活を送る上でのコミュニケーション技能など、さまざまな知識や情報の蓄積などが回復に向かわしめる要因となります。

浦河べてるの家（2010）は、10人の当事者（べてるメンバー）が池松麻穂（浦河べてるの家ソーシャルワーカー）の司会のもとに、リカバリーをテーマにミーティングを行った記録である。この中から何人かの発言を引用してみると、「むしろ少し病気があるほうが心地いい」（本田幹夫）、「これからもみんなの回復の仕方を参考にしていきたい」（山根耕平）、「病気だからこそ、その経験を活かして楽しみながら、いろんなことに取り組んでいく」（吉野雅子）、「入院中の仲間ともつながることも大切にしてます。リカバリーには、人懐っこさも大事…ぼくは病気があってこれでいいんだなって思ってる」（早坂潔）、などである。

前述の支援者の向谷地生良（2015）と当事者の浦河べてるの家（2010）から、リカバリーは、症状からの回復ではなく、仲間とつながり、自分の病気の経験を活かし、楽しめることなど、人生や生活の質の部分が重視されている。

以上を踏まえ、筆者らは、現時点で、リカバリーを、「治っていなくてもリカバリーは可能で、仲間の回復の仕方を参考にしながら、病気の体験を生かして人とつながり、生きることの取り戻しと新たな生き方を再発見すること」であると理解し、本研究に取り組むことにした。

Ⅲ　研究方法

1．分析対象

当事者研究の事例集ともいえる、べてるしあわせ研究所・向谷地生良『レッツ！ 当事者研究』（NPO法人コンボ発行）の第1巻（2009年）と第2巻（2011年）を分析の対象とした。

2．分析手順

分析対象の2冊を総合すると、「コミュニケーション系」、「幻覚・妄想系」、「人づきあい・自分づきあい系」、「恋愛系」、「就労系」、「依存系」の6分野の苦労の内容別に章立てされている。男性15人、女性16人、カップル5組の計36件（各巻18件）の当事者研究の成果が掲載されている（同一人物が2回以上登場する場合もある）。

まず量的分析の視点から、当事者研究の研究成果をテキストマイニングソフトウェアText Mining Studio 4.2（NTTデータ数理システム社）により、単語頻度分析で出現回数を確認することで、どのようなことが良く話題にされているかを把握した。続いて、評判分析により好評語と不評語を抽出した。そして、質的分析の視点から、テキストマイニングソフトの検索機能（原文参照機能）により、出現回数の多い単語に注目して、その単語を含む原文を確認した。質的分析を行うにあたり、西平（1996）によって示された伝記分析の「テーマ分析」（数人の人物に共通の心理的特性や心理学的な言葉に注目して分析する）の考え方に従い、36件の当事者研究の成果の中で良く話題にされている単語を含む原文を参照した。

Ⅳ　倫理的配慮

本書は、一般に出版されている書籍であり、著作権に配慮した。すなわち著者の表現や言葉などを改変せず、引用部分を明示し、出典を明記した。

Ⅴ　結果と考察

1．形式的特徴（基本情報）

総文数は4128文で平均文長（文字数）は15.3文字であった。また延べ単語数は24249語で単語種別数は4981単語であった（タイプ・トークン比は0.21）。

2．使用頻度の多い単語（単語頻度分析）

単語頻度分析（図1）より、使用頻度の高い上位10単語は、「自分」（657）、「苦労」・「人」（244）、「研究」（177）、「仲間」（161）、「仕事」（124）、「浦河」（119）、「お客さん」（105）、「わかる」（104）、

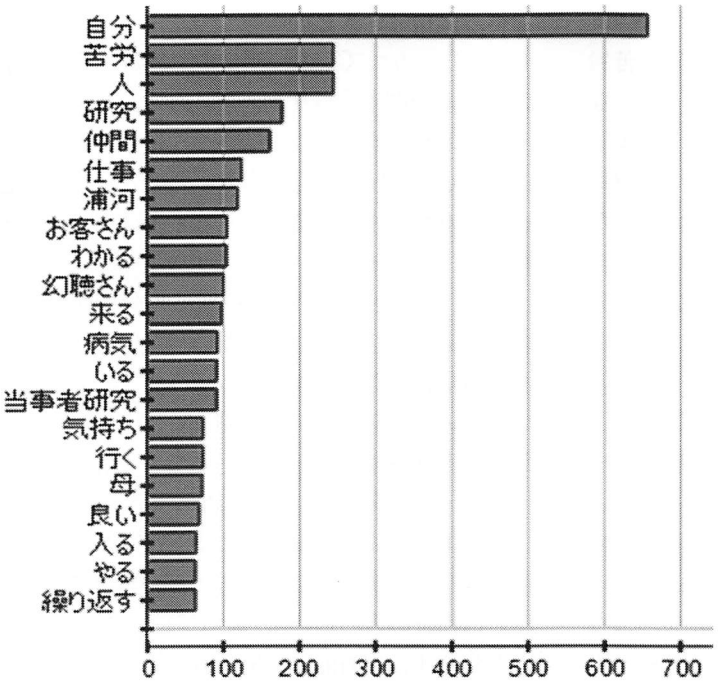

図１　出現頻度の多い単語（上位 21 語）

「幻聴さん」(100) であった（括弧内は使用頻度、以下同じ）。

３．好評語・不評語に着目して（評判分析）

評判分析とは、「単語に係り受けする好評語（ポジティブなイメージをもつ単語）と不評語（ネガティブなイメージをもつ単語）の頻度を抽出することで単語の評判を分析」（服部、2010）することである。

名詞を対象に好評語と不評語の上位単語を抽出した。好評語のランキングでは、「自分」(29)、「人」(19)、「苦労」(13)、「幻聴さん」(10)、「つきあい」・「助け方」(7)、「気持ち」(6)、「仲間」・「お客さん」・「人間」(5) の順に頻度の多い単語があった。 不評語のランキングでは、多い順に「自分」(29)、「情報公開」(15)、「人」(9)、「人間関係」・「状態」(7)、「具合」・「仕事」・「気持ち」・「幻聴さん」(6)、「感覚」・「幻聴」・「声」・「入院」(5) であった。「情報公開」が不評語の上位になったのは、「弱さの情報公開」というべてるの家のポジティブな理念が「弱さ」というネガティブな表現と結びついていることを反映したものである。

４．単語頻度分析より使用頻度に着目して（原文参照）

上位3つの単語である「自分」「苦労」「人」は他の単語と比べても頻度が高いため共通の話題と考え、この3つの単語に注目して原文参照を行った。逆に比較的語られなかった単語である、「病気」「回復」にも注目して原文参照を行った。その理由は、これら2単語の表現の様相を明らかにすることにより、当事者研究におけるリカバリーの特徴を明確にするためであった。

その原文を例示し、その原文が出現した箇所として、当事者の氏名、苦労の内容、巻-章、ページ、を示す。

（１）当事者研究では「自分」をどのように語るか

「今では、**自分**自身の言葉で話すことが本当に**自分**を助ける方法なんだと思います。」（鈴木真依：コミュニケーション系、Ⅰ-5章、p59）、「当事者研究をする前は、**自分**が病気に巻き込まれて、包まれているような感じでしたが、目の前に病気を置いて**自分**がちょっと離れて観察するというスタンスが持てるようになってきました。」（宮西勝子：幻覚・妄想系、Ⅰ-6章、p79）、「生きていくうえで持つべき**自分**の荷物を持つこともなく、誰ともぶつからず、苦しむこともなく、のんしゃらんと生きている状態でした。」（岩田めぐみ：幻覚・妄想系、Ⅰ-6章、p125）、「研究をすることであからさまに**自分**の苦労を皆に情報公開して自分のことをわかってもらい、じょうずな『**自分**の人生の運転』につながっていくんじゃないかと思いました。」（松原朝美：依存系、Ⅱ-12章、p209）

（２）当事者研究では「苦労」をどのように語るか

「私のやり方は『自分の**苦労**のまる投げ状態』だということを知りました。そこで、自分の**苦労**を大切にして、自分の面倒を見られるようになりたいと思って当事者研究をすることにしました。」(鈴木真依：コミュニケーション系、Ⅰ-5章、p52)、「自分の**苦労**を語りながら、ワーカーさんや当事者研究のメンバーに協力してもらい、一緒に自爆のパターンを解明することと、有効な自分の助け方が上手になるために、SSTや当事者研究ミーティングに参加しながら研究を進めました。」(宮西勝子：幻覚・妄想系、Ⅰ-6章、p73)、「ホワイトボードに自分の**苦労**を出し合って行き詰まりのパターンを研究しました。幻聴にジャックされたときに、その都度、仲間や関係者に相談し『自分の助け方』を探りました。」(阿部智穂：幻覚・妄想系、Ⅰ-6章、p93)、「自分のつらさを当事者研究ミーティングで聞いてもらい、その**苦労**の内容から私の自己病名は、『統合失調症生活音恐怖型引越しタイプ』になりました。」(浅古朗：幻覚・妄想系、Ⅰ-6章、p111)

(3)当事者研究では「人」をどのように語るか

「私にとって病院が唯一の安心できる場所でした。『病気』が安心を得るための媒体で、病気を使って**人**とつながっていたのです。」(鈴木真依：コミュニケーション系、Ⅰ-5章、p54)、「『帰ったら腕切るかもしれません』とか、『大量服薬をするかもしれない』と訴えて粘り勝ちの入院をしていました。そういう言葉を使ってしか先生と話ができませんでした。私にとっては、病気じゃなくなるということは、**人**とつながる手だてを失う恐怖感がありました。」(鈴木真依：コミュニケーション系、Ⅰ-5章、p55)、「幻聴さん依存から脱却するには、現実の**人**とのつながりを実感することがポイントです。」(阿部智穂：幻覚・妄想系、Ⅰ-6章、p98)、「さびしさや不安が募ると、ついつい**人**に依存したくなりますが、自分の足で立って、ちゃんと自分で自分を助けることができるように心がけて、苦労の丸投げでない方法を身につけようとしています。」(岩田めぐみ：幻覚・妄想系、Ⅰ-6章、p126)、「そこで早速仲間の協力を得て、自分と**人**とのつながりをじゃまする『バリア』のメカニズムの解明に取り組み、自分の弱さの情報公開が『バリア』を弱めて**人**とのつながり感を取り戻すことに役に立つことがわかった半面、『**人**づきあいの現実感の手ごたえ』が増すと逆に不安も大きくなることもわかりました。」(千葉大介：人づきあい・自分づきあい系、Ⅱ-9章、p108)、「**人**とつながった感覚や自分の弱さの情報を出せて安心しました。たいへんでしたが、それが自信につながりました。」(森亮之：人づきあい・自分づきあい系、Ⅱ-9章、p128)

(4)当事者研究で比較的語られなかった表現

(4)－1「病気」という単語

分析対象である2冊の本において「病気」は合計92回の出現で第12位であった。当事者研究の報告は精神障害の病いについての語りであるにもかかわらず、相対的に出現回数が少なかったことに注目したい。当事者研究は病いの克服のための研究ではなく、病気に関連する生活や人生の苦労を対象とした研究であることの現れである。

当事者研究において「病気」の語りとして以下の表現は象徴的である。

「今は**病気**、生活、人生の三つをピラミッド形式にして、頂点が**病気**で生活、人生と徐々に降りていくのが**病気**からの回復だと思っています。でも**病気**の症状が落ち着いてくると、**病気**のときはとても苦しかったけど、心配や考えることが**病気**のことだけですんでいたのが、仲間や家族の関係や現実の暮らしの苦労がふえて、とてもたいへんになってきました。そうすると、今の苦労から逃れるために、また**病気**の症状に方向転換しようとして、仲間や家族などの問題から自分を守ろうとして**病気**にもどろうとする力が働くこともわかりました。」(浅野智彦：依存系、Ⅱ-12章、p223～p224)

この語りは、病いに起因した生活の苦労から自分を守るために再び病気にもどろうとする、病気の果たす役割があるという逆説的な関係をうまく表現している。

(4)－2「回復」をどのように語るか

本書において「回復」は合計15回のみの出現であった。ここでは「回復」をめぐって、どのような内容が述べられているかを確認するために、「回復」に着目して原文参照したものが以下である。

「『全力疾走』からの**回復**」（伊藤知之：人づきあい・自分づきあい系、Ⅰ-7章、p137）、「**回復**してきて、幻覚妄想大会でグランプリを取ることができました。」「**回復**するために発見したことを、他に悩んでいる人に伝えて助けてあげたい。」（亀井英俊：就労系、Ⅰ-9章、p203、p209）、「**回復**までの期間を整理しました。」（江良泰一：コミュニケーション系、Ⅱ-7章、p74）、「仲間と一緒に**回復**していきたい。」（浅野智彦：依存系、Ⅱ-12章、p223）、等の表現が見られた。

これらの語りは、病気や症状の消失ではなく、苦労を相対化し、場合によっては病気の体験を仲間と共有し、ポジティブに評価し、人の役に立ちたい思いを表現することで病気になったことの意味を発見している。そして、仲間とともにリカバリーすることが大事であることを示している。

5.『レッツ！ 当事者研究1･2』の語りの特徴

前述の結果より、当事者研究では「回復」の使用頻度が低いことがひとつの特徴であると言える。当事者研究とは向谷地生良（2015）が述べるように、「病気を体験した当事者自身が、仲間や関係者と一緒に自分の生きづらさの意味を考えたり、解消策などについて研究し合う活動」であり、「回復」という表現を用いないで回復について「研究」していると言える。また「病気」という言葉よりも「苦労」という単語でトラブルを表現し、人と問題を切り離すという問題解決思考のグループによる研究活動を行っていることが明らかになった。

このことは、伊藤・福井（2013）が述べるように、浦河べてるの家の活動を「リカバリーという言葉は使われないものの、１つのリカバリーを指向した包括的なプログラム」であるとする見方に通じるものである。

単語頻度分析から、当事者研究とは自分と病気の苦労と人間関係に関する研究であることが可視化された。評判分析から「自分」「人」「幻聴さん」は好評語としても評価されていた。このことは病気に対する当事者研究におけるポジティブな姿勢の現れである。「回復」という表現においては、仲間と共に、回復のプロセスで、自分が発見したことを悩んでいる人や社会に伝えたい思いに言及していた。野中（2011）は、「新たなリカバリー概念は…（略）…精神障害をもつ方々の手記活動から生まれた」と意義づけ、当事者のナラティブにはリカバリーのヒントが満載されていると指摘した。本書の6分野の苦労の内容からは、精神障害者固有の「生活のしづらさ」（臺、1981）があらわれていた。野中（2012）は浦河べてるの家の実践を取り上げ、「治療して『病気』自体をなくしてしまうことを意識していません。こうしたあり方は『リカバリー（回復）』という言葉で議論され、注目される」と述べた。浦河べてるの家の当事者研究の成果は、病気と上手につきあいながら、仲間とともに「つながりの回復」（向谷地生良、2009）を介しての、人生や生活の取り戻しをした回復の姿であると言える。

6．浦河べてるの家の当事者研究に見るリカバリーの姿

向谷地・浦河べてるの家（2006）は、浦河べてるの家の当事者である西坂自然の当事者研究において、回復を「石ころの原理」で説明している。岩のかけらが「人間関係の川」を下流に下るうちに、他のかけらとぶつかり、もまれ合う中で、さまざまな形の触り心地の良い小石になっていくような仲間と共にある姿について述べている。この光景が、浦河べてるの家の回復イメージであるといえる。大高・いとう・小平（2010）は、浦河べてるの家の当事者研究のサイトをテキストマイニング分析した結果、その語りの構造から、浦河べてるの家の理念を特徴的に表し、言葉を取り戻す作業のなかで生まれる「考える」ことへの回復がある、と述べた。

前述の原文参照において、特に注目したいのは、「回復してきて、幻覚妄想大会でグランプリを取ることができました」(亀井英俊)という表現である。症状がなくなるということではなく、病気とともに生きていくという浦河べてるの家らしい回復への考え方が現れているといえよう。今回のテキストマイニングの結果と、向谷地生良(2015)と合わせて考えると、回復に直接的に言及せずに回復を語っていることが重要と考えた。回復とは症状からの脱却ではなく、病気の症状を回復のはじまりと捉え、浦河べてるの家の当事者研究の語りにおいては、言葉の取り戻しや人生や生活の取り戻しという意味で、症状があっても「それで順調」と考える思想を具現化していることが、当事者の語りより明らかにされたといえる。

Ⅵ　浦河べてるの家の当事者研究の語りが示唆するもの

精神科医の八木(2009)は、「すでに慣れ親しんでいるはずのこの病について驚きを新たにすることが多かった」とし、20数冊の統合失調症の手記の分析を、「病との共生」に至る長い回復過程の物語として再構成し出版した。小平・いとう(2012)は、統合失調症の闘病記を収集・検索し、217冊の闘病記リストを作成した上で、小平・いとう(2013)は、それらの本のタイトルをテキストマイニングで分析し、「生きる」という表現が特徴的であることを見出している。看護職者はナラティブを手がかりに、リカバリーについて当事者の視点から捉えなおす必要があるのではないか。そのために、当事者たちによる病いの体験と語りによるリカバリーに焦点を当てて、症状の有無や程度だけに着目するのではなく、たとえば佐藤(佐久間)(2015)の「患者体験学」(Health Experience Research)や、笠井(2015)が述べる、その人らしいリカバリーに導いていくという、「価値にもとづくアプローチ(values-based approach)」の提案も参照したい。

野中(2012)は、「ディスカバリーが発見であれば、リカバリーは『もう一度発見すること』です」と述べている。向谷地宣明(2016)では、「『自分自身で、共に』、リカバリー(回復)をディスカバリー(発見)していくところに当事者研究の醍醐味がある」と述べている。このようなディスカバリー(発見)は、先に述べた向谷地生良(2015)の回復(リカバリー)である、「『病気さえなかったら』の人生から、『病気の体験を生かした』人生をいつも大切にしてきたのが、べてるの人たちの選択した生き方」の考え方に通じるものであろう。Frank(1995/2002)は、病いを得た人の語りを、「回復の語り」「混沌の語り」「探求の語り」の3つに特徴づけている。このうち、「探求の語り」とは「経験を通じて何かが獲得されるのだという病む人の信念が、探求を成立させる」「探求の語りは、病む人に、その人自身の物語の語り手としての声を与える。探求の物語の中でのみ、語り手は語るべき物語を持つから」と説明されているものであるが、浦河べてるの家の当事者研究の語りは、「探求の語り」に該当するものであろう。そして、「べてるまつり」などで行われる当事者研究のように、物語の語り手としての「声」を聞く聞き手の存在が重要なのである。そのことは、向谷地宣明(2016)の、「『自分自身で、共に』、リカバリー(回復)をディスカバリー(発見)していく」ことであり、向谷地生良(2015)の「自分の言葉で語ることができた時に回復が始ま」るのである。

筆者らが、本研究の用語の定義において述べた、リカバリーは、「治っていなくてもリカバリーは可能で、仲間の回復の仕方を参考にしながら、病気の体験を生かして人とつながり、生きることの取り戻しと新たな生き方を再発見すること」であるということが、改めて明確にされたといえる。当事者研究は当事者視点による語りである。その貴重な語りの研究成果を根拠にして、これまでにはないスタンスからの看護や支援のあり方や考え方の創出は喫緊の課題である。

Ⅶ　本研究の限界と今後の課題

本研究の限界として、回復の語りをめぐって、『レッツ！ 当事者研究』第１巻と第２巻を対象に分析した点である。今後の課題は、他の浦河べてるの家や、長きにわたり浦河べてるの家を支えている支援者の向谷地生良氏の著作物、執筆スタイルとして異なる特徴をもつ闘病記、著者が家族であることなど、多様な著作物のテキストマイニング分析を行うことである（例えば、小平・いとう(2016)など）。そして、西平（1996）の「比較伝記的方法」で「その個人と類似した人物または対照的な人物とを比較する」分析をはじめ、データを全部合わせてのテキストマイニング分析などを通して、統合失調症からのリカバリーのモデル化を試みることである。

謝　辞

本研究はJSPS科研費15K11827の助成を受けたものです。貴重なコメントをいただきました北海道医療大学・浦河べてるの家の向谷地生良先生と浦河べてるの家の関係者の皆様に感謝します。また、資料整理でお世話になった木下恵美さん、堀口裕太さんに記して感謝します。

付　記

本研究は、小平・いとう（2014）精神障害者の回復の語り：浦河べてるの家における当事者研究の記述のテキストマイニング 日本心理学会第78回大会（同志社大学）論文集、305.として発表されたものに加筆修正したものである。また、その一部は、2015年7月30日に北海道浦河町で開催された第12回当事者研究全国交流集会in浦河の講演として「当事者研究の可視化：テキストマイニングによる探求」（小平・いとう、2015）と題して報告した。本研究における利益相反は存在しない。

引用文献

べてるしあわせ研究所・向谷地生良（2009）. レッツ！ 当事者研究１.　千葉県市川市：NPO法人地域精神保健福祉機構・コンボ.

べてるしあわせ研究所・向谷地生良（2011）. レッツ！ 当事者研究２.　千葉県市川市：NPO法人地域精神保健福祉機構・コンボ.

Frank, A.（1995）. *The wounded storyteller: Body, illness, and ethics*. Chicago, IL: The University of Chicago Press. 鈴木智之（訳）（2002）. 傷ついた物語の語り手：身体・病い・倫理. 東京：ゆみる出版.

服部兼敏（2010）. テキストマイニングで広がる看護の世界：Text Mining Studioを使いこなす. 京都：ナカニシヤ出版.

伊藤順一郎・福井里江（2013）. リカバリー.　福田正人・糸川昌成・村井俊哉・笠井清登（編）統合失調症　東京：医学書院　pp.597-604.

笠井清登（2015）統合失調症. 笠井清登・藤井直敬・福田正人・長谷川眞理子（編）思春期学. pp. 219-229. 東京：東京大学出版会

小平朋江・いとうたけひこ（2012）. 統合失調症の闘病記のリスト：ナラティブ教材の可能性を展望する. 心理科学, 33（2）, 64-77.

小平朋江・いとうたけひこ（2013）. 統合失調症当事者の語りのテキストマイニング：闘病記のタイトル分析を中心に. 看護研究,46（5）, 485-492.

小平朋江・いとうたけひこ（2016）. 当事者研究とリカバリーの思想：向谷地生良（2015）『精神障害と教会』のテキストマイニング分析. 第36回日本看護科学学会学術集会（東京）

向谷地生良（2009）. 技法以前: べてるの家のつくりかた.　東京：医学書院

向谷地生良（2015）. 精神障害と教会：教会が教会であるために. 東京：いのちのことば社

向谷地生良・浦河べてるの家（2006）. 安心して絶望できる人生　東京：日本放送出版協会（NHK出版）

向谷地宣明（2016）. こうすればできる当事者研究（2）自分の助け方をどうやって探すか. 精神看護, 19（2）, 185-189.

野中猛（2011）. 図説リカバリー：医療保健福祉のキーワード.　東京：中央法規出版

野中猛（2012）. 心の病：回復への道.　東京：岩波書店

西平直喜（1996）. 生育史心理学序説：伝記研究から自分

史制作へ. 東京：金子書房
大高庸平・いとうたけひこ・小平朋江（2010）. 精神障害者の自助の心理教育プログラム「当事者研究」の構造と精神保健看護学への意義：「浦河べてるの家」のウェブサイト「当事者研究の部屋」の語りのテキストマイニングより. 日本精神保健看護学会誌, 19（2）, 43-54.
佐藤（佐久間）りか（2015）. 患者体験学（Health Experience Research）の実践：生命予後告知のあり方を巡って～「健康と病いの語り」のデータから. 東西南北2015：和光大学総合文化研究所年報, 134-144.
浦河べてるの家（2010）.弱さを絆に：べてるの家のリカバリー.精神科臨床サービス, 10（4）460-462.
臺 弘（1984）. 生活療法の復権. 精神医学, 26（8）, 803-814.
八木剛平（2009）. 手記から学ぶ統合失調症：精神医学の原点に還る 東京：金原出版

（2016年11月27日受稿、2017年1月24日受理）

Recovery through Narratives by Self-Directed Research in Urakawa Bethel House: A Text Mining Analysis

Tomoe KODAIRA
（Seirei Christopher University）

Takehiko ITO
（Wako University）

View publication stats